



## 若葉山

森清堯

山藤や沼の昏さをなぐさめて  
夕蛙稿に追はるる古机  
仏めく岩に触れをり花馬酔木  
萎ゆる気を震ひ立たせぬ松の芯  
惜春や湖を遠見に杯を上げ  
八十八夜俄に雨意の風騒ぎ  
夏隣浦の潮の香濃かりけり  
行く春やはるか富士のうすき影  
そこぬけに明るき里や柿若葉  
更衣心のかくしそのままに  
若葉山同じと見えて色ゆたか  
洋館の垣ジャスマンをあふれさせ

## 日の暈

岡野里子

青々と百樹の杜や匂鳥  
風に組み風に崩れて花筏  
走り根の山河のごとし花の塵  
中天の日の暈二重花水木  
末広の水尾の寄り来や春の鴨  
生籬の青より出づる黄蝶かな  
山藤や樹々へ傾れて滝をなし  
駅頭へ届く暮鐘や濃山吹  
石垣の割れ目に息吹今朝の夏  
岩間より苔の下水夏立ちぬ  
初夏の沖の大波湾小波  
一湾の細波のきら風薫る

柿若葉

黒滝志麻子

(顧問)

ゆるゆるの山羊の首輪や山笑ふ  
百僧の廊行く軋み花の冷え  
抱きたる嬰も花人寝息たつ  
老鶯や釣瓶の鎖長くして  
柿若葉廊に置かるる毬ひとつ  
ビル街の閑散として夏燕  
道をそれて踊子草の花に会ふ  
湖の水より暮れて麦の秋

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



夏柳

森清信子

春光や素早き魚の鱗の綺羅  
左右よりわつと押し寄せ緋のつつじ  
出窓開け夏鶯を堪能す  
草陰の水音軽しえごの花  
さらさらと風やりすごし夏柳  
湖と光を分かたつ新樹かな  
池尻へ広がる油膜木下闇  
青蘆や風に興ずる高さまで  
丘陵の風に泳ぎて若楓  
薫風や心の窓を開け放ち

## 熱帯魚

菅野日出子

眠られぬ厨に鳴きし浅蜷かな  
薫や日あたりの良き民家園  
餌台に見慣れぬ鳥や五月晴  
若竹や鶴見に残る長屋門  
若竹の寛茶室に人の声  
病院のロビーに憩ひ熱帯魚  
骨折の腰の痛みや立葵  
ベッドより仰ぐ青空新樹光  
寺領より老鶯らしき二三声  
花の名は知らず華やぐ水中花

## 草の餅

田中臥石

蛤を拾うて妻の海女姿  
鈴木しげをの若き残像草の餅  
娘家の降らんばかりの藤の花  
矢車の高鳴る句座や礼子宅  
母の日の花より庭の薔薇が好き  
海女の田の四五枚ばかり鯉幟  
田植機の婿に声掛け通りけり  
娘五十の早乙女振りや紺紺  
用水の流るる植田夕日涯き  
わだつみの小さき祠や浜万年青

## 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



永久の影

長尾タイ

甘き香を枝折る凶鑑や藤の下  
奥座敷の明けつ放しや武具飾り  
白鷺や孤高の曙の天を突く  
軽髯の子のころげ落ちたる速さかな  
母の日の早ばや済ます一人膳  
褪せぬ夢八十路を紡ぐ夏帽子  
懐郷や母の日傘の永久の影

竹の秋

今村千年

げんげ田に座せば膨らむ帰心かな  
夕映に飛礫となりぬつばくらめ  
山畑や風に散り初む罌粟の花  
鳥語降る湖面渡るや若葉風  
建長寺四方の若葉の照り映えて  
小判草捨て畑埋め百万両  
晩鐘の植田に映ゆや茜雲

罌粟の花

高木邦雄

石一つ雀隠れの猫の墓  
風そよぐ嵯峨の細道竹の秋  
暮れ泥む哲学の道春愁  
折りふしの禍福の昭和鳥雲に  
夏来る沖の白帆の二つ三つ  
ひとり来て夏鶯の中にをり  
みなもとは箱根用水田水引く

夏来る 大川暉美

八十八夜荒るる雨音風の音  
鳥曇畑の道の深轍  
能面に色の見えけり花曇  
捨畑の主役となりぬ姫女苑  
大輪の牡丹や重き雨ひと日  
夜目に浮く薔薇の白さや風新た  
膝抜けのジーンズ闊歩夏来る

初鰹 太田良一

食よりも朝寝の夢を選びけり  
潮鳴りの能登の民宿夏来る  
登る木を選ぶ子供や鯉のぼり  
疎開地の旧家の跡地かたつむり  
まな板に潮の香りや初鰹  
あめんぼの騒ぐ水田や雲奔る  
薄闇や矢倉に遊ぶ蜥蜴の子

葱坊主 岡田史女

雀隠れ三浦は光あふれけり  
傘寿とはこんなものかも葱坊主  
サスペンスドラマ佳境や春の雷  
ワクチンの予約てこずる端午の日  
竹皮を脱ぐや七曜過ぎやすき  
青天へヨットは沖をはみ出せり  
初夏の海へ出てゆくタグボート

金沢八景 小田嶋野笛

足出でて蝌蚪のカオスや池の底  
鶯や早熟めける声音して  
八景の五景で戻る花の冷え  
茶袱台に吉野の色や桜餅  
電柱の独立宣言雀の子  
八十の昭子和子や昭和の日  
老鶯や先師の墓は坂の上

長閑 加藤静江

長閑けしや野菜並ぶる陶器店  
結界の苔の石段落花舞ふ  
山藤の短き房のなだれかな  
御衣黄てふ桜を尋ね葛折  
雨あとの空の青さや飛花落花  
囀や寺裏の土軟かき  
風香る海沿ひに建つ資料館

滑り台 齊藤マキ子

海苔を搔く海女や波間をはかりつつ  
堰越えて渦にくづるる花筏  
路地の春端唄らしきをさらふ声  
若草へ子を放り出し滑り台  
滑り台の天辺の混みこどもの日  
カイゼル髭の祖父の遺影や武具飾る  
薫風やジャングルジムに逆さの子



# 青炎集

## 森清 堯選

横浜 谷貝美世

古草は高きを残し風の中  
ひと枝の水漬く重さや山桜  
囀や小谷戸の森の小暗がり  
三ツ池の黙の深きや残る鴨  
山裾の桜や影をひろげぬて  
雑草の中にまぎれて茗荷竹

横浜 宮元陽子

横浜 池乗恵美子

人まばら豊旗雲に田螺鳴く  
花葎の野面へ星を撒きにけり  
土地自慢育て自慢や植木市  
剃髪の薄着の旅人夏近し  
朝顔時く家事の忙しさ解き放ち  
花粉症疫病暴るる世に居りて

平塚 尾崎千代一

横浜 山崎稔子

案内図の町家のカフェや朧月  
地下足袋の馴染む庭師の薄暑かな  
葉桜の綾なす影や縄電車  
灯を卓に作る擬餌鉤みどりの夜  
吉事日の人を迎ふる牡丹かな  
葛切や老舗の庭を見通して

プラタナスの芽吹き一斉並木道  
屹立の曙杉や風光る  
鶯の声降る木椅子にぎり飯  
八重桜散り連の池の面  
山若葉指の先まで薄みどり  
窓開けて目路いつぱいの新樹光

横浜 新倉ゆき江

大網白里 岡井マスミ

躑くや春満月に絆されて  
緑摘む指の痒れの和らぎぬ  
靴底の模様くつきり花の塵  
矢車のリズムの乱れ仇の風  
作柄の朝の声かけ茄子の苗  
鉄線や話を合はす長電話

垣の外は駅へ行く道春シヨール  
燕や非核宣言したる町  
石楠花や鬼の伝説この地にも  
青葉出て青葉へカーブすべり台  
花うばら水路の堰の錆つものり  
麦飯やまだまだ行ける一万歩

宮城 門間としゑ

横浜 小嶋紘一

かつばれに八十八夜の宴聞けて  
新しき鯉のぼり二基空ま青  
夏足袋を干し母の忌を仕舞ひけり  
修復の木彫観音緑さす  
峽の田の大小百や青田風  
我が寺の白陀師句碑や青時雨

あらせいとつ水遣る人へ朝の日矢  
アルプスの空の青さよ夏来る  
鳥よ来よ朝日に光るゆすらの実  
乳呑み児に母の恵みや若楓  
薔薇園や薔薇のむかうに氷川丸  
芍薬の花に片雨寺静か

横浜 岩上行雄

横浜 六崎正善

天へ向けひたすら気負ひ松の芯  
蓬餅在り処教へしお返しか  
鳥の恋わき目ふらざる太極拳  
蛇皮線を弾きつつの歌かげろへる  
無きピアノまだある気配春深む  
芍薬の花開く首尾四半刻

雲割つて零るるひかり八重桜  
子や鳥や白詰草の真つ盛り  
春筍を足裏でさぐる老翁かな  
風立つや農家の庭の大幟  
葛餅や御大師様の雀どち  
心字池の蓮の浮葉のゆらぎかな

# 耕 土 集

岡野 里子



洗濯機軽くまはすや夏衣

横浜 梅津まり子

高空に螺旋描く鳶夏立ちぬ

横浜 内山 みち

麦わら帽赤きりボンの見え隠れ

二の腕の白きを零し藍浴衣

夏暖簾裾を短く江戸小紋

新緑の染むるカーテンティータイム

夕風や宝鐸草の花あえか

爪草の畑光らせ走り梅雨

男等の饒舌絶えず浜長閑

葉山 伊藤 美緒

肩に光る安全札や一年生

川崎 木村 純子

名は小町蓄きりりと白菖蒲

磯蟹や右往左往の子等の声

青葉光馬車ゆつくりと蔵の町

こだはりの蕎麦屋一軒青田風

一斉に庭いぢる背五月来る

カーネーション売るや亭午のビルの前

今年又甲を飾る出窓かな

切り岸を削る潮騒夏来る

横浜 市川 夏子

沈丁の香りや服に持ち帰り

横浜 津野 桂子

石投げて立夏の湖の底覚ます

降りしきる谷戸の鳥語や夏帽子

受診待つ椅子の堅さや若葉冷

風薫るさらりと乾く濯ぎ物

ネモフィラの一面の丘春日傘

友の声高しつっじの向かうより

春雷や軒を借りたる俄雨

参拝の肩にまとはる揚羽蝶

外灯の一縷の光花水木

横浜 佐藤 勝代

白木蓮ゆるる絹地の佇まひ

横浜 西 計郎

子等の書の勢ひ目立つ立夏かな

尖りたる日や水に流して豆ご飯

菖蒲湯や膝腰さすり後期生き

茉莉花の朝のオアシス注ぐ水

野の川の寄り来る鯉や花あやめ

日ののぼる飛驒の山湯や緑さす

姫沙羅のかかぐる百花箱根路

新じやがや皮つきのまま一口に

横浜 村田 敦子

竹林を抜けて城跡桜満つ

横浜 須加 葉子

山路行く遠目に高き桐の花

古城跡より望む湖面や時鳥

木道へ香りの届きえこの花

走り梅雨髪切りに行く美容院

桜陰遇ふ人のみな懐しく

逝く春の山王草堂旧き松

二万歩の大山詣で杜鵑

有頂天の野鳥の声や五月来る

横浜 平野 秀子

友よりの届く菓子折春の虹

横浜 玉川 利江

軽き足わつと縁に囲まれて

石楠花や不意に明るむ坂の道

金雀枝や幼の籠に二つ三つ

山法師ひと日やさしさ保ちたき

久々の校内チャイム春日影

歳時記と小説据ゑて春炬燵

父の忌や経読み鳥の鳴きくれて

仏壇の母へ活けたりカーネーション

上潮に春月上り紡ひ舟

横浜 伊藤 鴉

貼紙の鴉に注意緑さす

横浜 平田 きみ

春暁や潮騒蹴つて船外機

海鳥の騒ぐ春潮離岸流

飯盒に釣果の眼張潮汁

潮騒のタープのランプ朧月

薬とて食ぶる麦飯昨日今日

緑児の伝ひ歩きや鯉のぼり

野の芝の榎の花やテント張り

上げ潮の太公望や五月来る